

東北大学公共政策大学院

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学公共政策大学院専門職大学院係
TEL. 022-217-4945
E-mail contact@publicpolicy.law.tohoku.ac.jp
<http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>

■ アクセスマップ



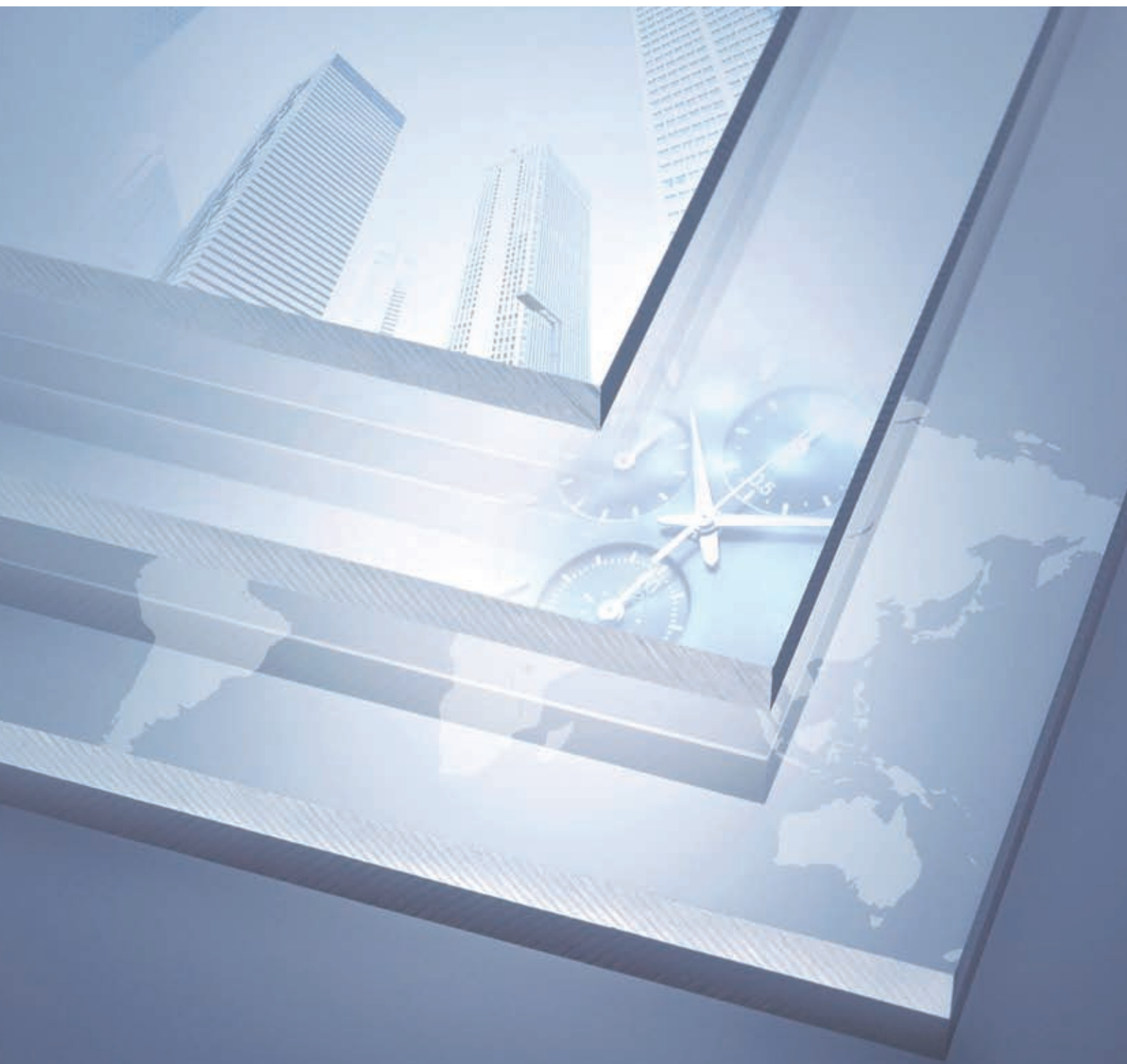
- ☐ 東京駅から仙台駅まで約100分
- ☐ JR仙台駅から片平キャンパスまで徒歩約15分

■ 片平キャンパス





東北大学公共政策大学院
SCHOOL OF PUBLIC POLICY, TOHOKU UNIVERSITY



「公共」の「政策大学院」をめざして——

大学院案内 2011

<http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>



TOHOKU
UNIVERSITY

「公共」の 「政策大学院」をめざして

東北大学公共政策大学院は、国家・地方・国際公務員、一部の民間部門などの「政策の企画立案についての専門性を有する人材を教育する大学院」として、2004年に発足しました。

「今、時代は大きく動いています。世界的には、グローバル化・情報化の進展、環境問題等新たな政策課題の重要性の高まりなどがあります。日本においては、経済社会の成熟化、少子高齢化の急速な進行などがあります。これらは、海外や過去に処方箋を求めても見つかるようなものではなく、我々が自ら考えていかなければならない問題ばかりです。こうした状況の中で、『公』に携わる人にも、従来を超える能力・資質・知識等が求められています。」——これは、その時に私たちが打ち出した設置の趣旨ですが、基本的な考え方は今も同じです。「公」ないし「公共性」は、これからますます多様化していくでしょう。もはや「公」とは何か、という問いには誰も答えてはくれません。自ら体験し、それを理論的観点から問い直し、他人と意見を交換し、議論を交わす中で、おぼろげながら仄見えるものなのです。

政策の根本に横たわる「公」とは何か自らの頭で考えぬき、「公」を目指して行動する姿勢を持った人材を育てる大学院——それが私たちの大学院です。

そのために私たちは、知識教授型の授業では決して得ることのできないもの、たとえば、フィールド・サーヴェイ、徹底した議論、多面的な観点からの問題の理解、その上での問題の本質を捉える力、実行可能性の検証、理論による裏打ちといった要素をカリキュラムの中心にしています。それが本大学院独自の授業である「公共政策ワークショップ」です。そこでは、教員集団と学生グループとは、互いの顔が見える空間の中で、具体的な「政策」の立案作業に取り組みます。週3コマ、自主活動を含めれば週6コマ以上のインテンシヴな討論を、実務家・研究者の専任教員がしっかりと見つめる中で学生が一年を通じて続け、最終的な政策案を練り上げていきます。

学生は、年間を通じた体験修得型の授業を通じ

て、自ら考え、行動し、ときには失敗を通じて学んでいきます。つまり、「公」の問題を考えることは、「公とは○○だ」と言い放つことではなく、「公」を考えぬいたプロセスを周囲の人たちと一つ一つ共有していくことなのです。

本大学院は、「公」という価値をカリキュラムの中にプロセスとして綿密に組み込みました。新入生オリエンテーションから最終報告会までの行事の数々、少人数のスクーリング、「公共政策ワークショップ」は、すべて綿密に計画された集団の作業です。これはつまり、「公」という理念に近づくための仕掛けなのです。大学院の中で、共同で「公」とは何かを考えぬいたときにはじめて、真の意味で社会の公共空間に参画し、これを担う有用な人材が育つ——私たちは堅くこう信じています。

「公共」の「政策大学院」をめざして、私たちはこれからも歩んでいきます。



1. 体験型政策教育を中核とするカリキュラム

必須科目「公共政策ワークショップ」で集団作業を通じた政策企画立案を体験します。テーマは現在の行政機関が抱える政策課題です。随時政策現場に調査に行き、教員の丁寧な指導と学生の自主討論を通じて政策案を作成する実践を通して、学生は自らのスキルを磨きます。

2. 少数精鋭の学生に対するきめ細かな教育

1学年30人(2年制)の学生に対して、主要な授業(公共政策ワークショップ、基幹科目等)だけでも10名以上の教員がインテンシヴに担当し、きめ細かな教育を実施します。また、学生一人一人にアドバイザーがつき、履修相談・進路相談を定期的に行っています。

3. 高度な理論教育

新しい時代にふさわしい公共政策を企画するための基盤となる高度な理論を、気鋭の研究者教員が教育します。政策現場を見つめ直し、対象を客観的に分析する姿勢を学びます。

4. 多数の実務家による政策実務の教育

6名の実務家教員による公共政策ワークショップと講義のほか、非常勤講師として、中央省庁の事務次官・局長による講演、自治体首長・地域経済界・マスコミ関係者による講演も随時行われます。

5. 中央政府・地方自治体・国際機関・民間部門等における 公共政策の企画立案を担う「政策プロフェッショナル」を養成

6. 2年間で修了

実務経験を有し、かつ特に優秀な成績を修めた学生に限り、1年間で修了も可能。

7. 修了者には「公共法政策修士(専門職)」を授与



CURRICULUM

[カリキュラム]

東北大学公共政策大学院のカリキュラム

東北大学公共政策大学院のカリキュラムは、
「必須科目」、「基幹科目」、「展開科目」より構成されています。
修了には、必須科目・基幹科目を含めて48単位の履修が必要です。

● 履修の流れは、以下の図のようになります。



1 必須科目 (1年次・2年次配当、26単位)

「必須科目」は、「公共政策ワークショップI(12単位)」および「公共政策ワークショップII(12単位)」ならびに「公共政策の展望と方法論(2単位)」です。

【公共政策ワークショップ】 (1年次・2年次配当、各12単位で計24単位必修)

基礎的な科目の履修と並行して、学生は「公共政策ワークショップI・II」を履修し、現実の政策課題を自ら調査し、解決策を立案する実務研修を2年にわたって行います。

1年次では、「公共政策ワークショップI」を通年履修します。ここでは、中央官庁・地方自治体などの各種団体・組織(以下、「プロジェクト機関」と呼ぶ)との協力関係を結び、それらが抱える政策課題への解決策を立案するため、実務家教員・研究者教員の指導の下、6～8名程度の学生がグループ作業で、政策課題の具体化・行政機関へのヒアリング・現場調査・統計データの収集を行いつつ、討論を繰り返して、解決案を作成します。

解決案は、プロジェクト機関の担当者ないしは学外の実務家の前でプレゼンテーションされ、さらには最終報告書として提出されます。最終報告書(そのプレゼンテーションを含む)に基づいてグループ単位の評価を行った上で、個々の学生のワークショップにおける活動状況等により成績が評価されます。

国際機関を対象とするものを除けば、「プロジェクト機関」を仙台市近辺のものとすることによって、学生が臆せず「プロジェクト機関」と接触で

きるよう配慮するとともに、身近な政策課題を調査対象とすることによって、学部卒の学生が円滑に政策実務に取り組めるよう配慮しています。

2年次では、学生は「公共政策ワークショップII」を通年履修します。これは、それぞれの学生が担当の実務家教員・担当者教員と相談しながら独自の政策課題を選択するものです。

政策課題は、当初から「プロジェクト機関」を特定せず、国ないしは国際レベルの大規模な 이슈を学生が自ら調べて、各自が設定します。「公共政策ワークショップI」で調査の基本的な技法を習得した学生は、担当の実務家教員・他の学生と十分な討論を行いながら、中央省庁の本省庁さらには諸外国の国際機関本部などに自ら足を運んで担当者と接触し、現場で自ら調査を行うことによって、調査技法及び実社会での交渉技術の一層の向上に努めます。

調査の成果は、逐次中間報告の形で各セミナーで討論に付され、綿密に議論を重ねていくことによって、学生の相互啓発を促し、その意味でグループ活動としての要素をとりいれます。その成績は、リサーチ・ペーパーと口述試験によって評定されます。

【公共政策の展望と方法論】 (1年次前期配当(集中)、2単位必修)

入学直後において、学生は「公共政策の展望と方法論」を履修し、公共政策の総論講義を受けた上で、インターネットによる情報収集や、自ら情報を「足で稼ぐ」インタビューなど、政策実務を調査するための基本的な技法を集中的に習得します。さらに、前期終了前の集中講義を通じて調

査統計技法の習得を目指します。

ここでは、法学部出身の学生のみならず、理科系を含めた他学部出身の学生にも配慮した教育を行い、すべての学生が円滑に履修を行えるよう十分留意しています。

2 基幹科目 (1年次・2年次配当、18単位まで選択必修)

学生は1年次より、必須科目とは別に、「基幹科目」の諸科目を履修することが求められます。「基幹科目」は法学、政治学、経済学、自然科学などの分野からバランスよく構成され、このうち18単位が選択必修となります。

「基幹科目」に配当されている授業は可能な限り学際的であることが目指され、複数の法領域・政策領域に関わる問題を多角的な学問領域から分析するように配慮されています。科目によっては、研究者教員、実務家教員との連携・学外の実務家による講演なども交えて行われます。

また、将来行政・政治に関わる公人となることが期待される学生には、公共性についての理解を深め、現象の背後に存在する理念的・価値的な

問題についての洞察力を涵養することが求められます。したがって、学生には、研究者教員の指導の下で、大量の研究文献のリーディング・アサインメント及びターム・ペーパーが課せられることもあります。

さらに、多様な政策領域についてより深く理解するために、実務家教員ないしは政策専門家による政策体系についての授業も開講されます。これは、政策実務を明晰かつ平明な「体系」として教授するとともに、事例に即して、体系の現実的意味の理解をも目指すものです。政策実務の授業を、単なる平板なスキルの問題としてではなく、「体系」的・理論的深みを備えた問題として理解することが、この授業のねらいです。

3 展開科目 (1年次・2年次配当、自由選択)

「必須科目」及び「基幹科目」の履修と並行して、学生は必要に応じて、より高度な社会科学の専門知識を習得し、または理科系の諸学を含めたより広範な領域にわたる政策学について学びます。

東北大学公共政策大学院科目一覧

大学院1年、2年 (M1/M2) において、必須科目、基幹科目、展開科目として次の授業を開設する予定です。

① 必須科目

- 公共政策ワークショップ I
 - ・プロジェクトA
 - ・プロジェクトB
 - ・プロジェクトC
 - ・プロジェクトD
- 公共政策ワークショップ II
- 公共政策の展望と方法論

② 基幹科目

国際社会と各国法秩序／租税制度論／政策税制論／
統治機構の動態分析／経済学理論／財政学／
政策分析の基礎と応用／公共法政策通論／
地域社会と公共政策論Ⅱ／地方自治法／環境法／
社会福祉法／現代の行政法制とその横断的検討／
公共政策基礎理論／健康・医療と公共政策

③ 展開科目

租税法原論／国際関係論演習／実務労働法Ⅰ／実務労働法Ⅱ／
社会保障法／経済法Ⅰ／経済法Ⅱ／トランスナショナル情報法／
ジェンダーと法演習／東アジア政治外交論演習／
ヨーロッパ政治史演習／法と経済学／環境法Ⅱ／行政学演習／
社会資本整備政策演習／ASEAN論演習／西洋政治思想史演習／
Japan, East Asia and the World

VOICE 教員コラム



教授・東北大学前副学長

大西 仁

グローバルな視野と
行動力を育てる

グローバリゼーションの進展に伴い、地球環境破壊をはじめ一国の政府では解決不可能な問題が出現しています。さらに福祉や治安維持や経済運営など、従来は主として一国の政府が単独で対処してきた問題でも、今や国際連携なくしては、国民の満足を得る政策を立案・実施することが困難になっています。世界の仲間と協力して人類社会が直面する問題の解決に取り組めるような、視野と行動力を備えた「グローバル化時代の政策プロフェッショナル」を育てるのも、本公共政策大学院の目標です。

1949年東京都生まれ。1972年東京大学法学部卒業。カリフォルニア大学バークレー校Ph.D.コース、東京大学助手、東北大学助教授を経て、東北大学教授。オックスフォード大学客員研究員、仏エコール・ノルマル・シュペリール(リヨン)客員教授、日本平和学会会長、バグウオッシュ会談評議員、東北大学理事・副学長などを歴任。専攻は国際政治。



教授

澁谷 雅弘

人の意見を
聞くということ

政策プロフェッショナルに必要な資質の一つに、人の意見に謙虚に耳を傾けられるという能力があると思います。これは、単に意見を聞きっぱなしとすることでも、それをまこと受け入れることでもありません。その意見の論拠について深く考えた上で、正当であると考えるものを受け入れ、そうでないと考えるものには事実や論理に基づいて反論することを行います。こうしたプロセスを経ることによって、たとえ自分の考えが結論としては変わらなかったとしても、よりしっかりとした基礎を持ったものとなるでしょう。その意味で、自分の考えと反対の意見について深く考えることこそ、自分の考えを鍛えるためには有益であるといえます。

1966年4月4日、北海道滝川市生まれ。1989年3月、東京大学法学部卒業。東京大学助手、講師を経て、1995年2月より東北大学助教授、2005年4月より東北大学教授、2006年4月より2009年3月まで公共政策大学院院長。専攻は租税法。



教授

前田 真明

政策立案を学ぶ
理想郷

これまで日銀、公取委、経済産業省と様々な職場で、新業務拠点の建設プロジェクトの企画立案、所管する法律の四半世紀振り、あるいは三十数年ぶりという大きな改正作業に携わる機会等に恵まれましたが、いつも後で思うのは、反省点も決して少なくなかったという思いです。こういう政策の企画立案について勉強できるところで学ぶ機会があればよかったのにと思うことしきりでしたが、この公共政策大学院に赴任して、「まさに、ここは、その理想郷じゃないか。」と学生達をうらやましく思っています。日々、熱い議論が戦わされ、日本の行く末を見つめる研究ができるこの大学院に来て、より望ましい公共政策実現に向けて一緒に汗を流しましょう。

1986年慶応大学経済学部卒業、米フレッチャー法律外交大学院修了、1986年日本銀行入行後、調査統計局、国際局等を経て、公取委事務総局入局。経済取引局企画室長、経済産業省消費経済対策課長、公取委特別第一審査長を経て、2009年から現職。



准教授

小玉 典彦

仙台の地で
熱い議論を

昨年度担当した公共政策ワークショップ I では、社会経済情勢が大きく変化する中で新たなニーズに対応した道路管理のあり方はどうあるべきかというテーマについて、宮城県大崎市をフィールドとして、机上の議論だけではなく地に足のついた政策提言をまとめるべく、8名の学生と共に1年間奮闘してきました。

今年度前期は、社会資本整備政策演習を開講しています。社会資本整備をめぐる様々な政策課題のうち、ハツタダムの建設中止や高速道路の無料化など社会的にも議論となっているような問題を取り上げ、事実関係はどうか、どのような論点があるのか、方向性はどうか、皆で熱い議論を重ねるところです。

1975年新潟県生まれ。1999年一橋大学法学部卒業後、旧建設省(現国土交通省)に入省。建設省建設経済局、国土交通省土地・水資源局、住宅局、大臣官房、関東地方整備局道路部路政課長、同総務部人事課長を経て、2009年4月より現職。

WORKSHOP

[公共政策ワークショップ]



「公共政策ワークショップI・II」(1年次・2年次配当、各12単位で計24単位必修)とは、現実の政策課題を自ら調査し、解決策を立案することを通じて実務の現場の目線に立って、政策実務能力を修得することを目的とした体験型の授業です。教員の指導の下、集団作業の中で、フィールド・サーヴェイ、徹底した議論、問題の本質を捉える力、政策の実行可能性の検証、理論的裏づけなど、政策を企画立案する上で必要な観点を多角的に体験し、学生が自分の力で考え、失敗を乗り越えて進んでいく力を身につけることがねらいです。

● ワークショップ・プロジェクト一覧

2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
● 地域における地球温暖化対策(仙台市を事例として) ● 地域経済活性化のための地域金融機関及び金融行政の課題と将来像 ● 「21世紀東アジアのグランドデザイン構築における日本の役割」に関する政策提言 ● 地方都市の中心市街地活性化及び地方都市における産業廃棄物の適正処理対策	● 「平成の合併」後の基礎自治体における地域自治組織のあり方の再検討 ● 「地域活性化」の一般法則の研究 ● 「東アジアにおける地域協力:日本の平和と繁栄を実現するための推進の方途」に関する政策提言 ● 地方自治体の独自課税	● 農業を軸とする地域振興策について ● 地方公共団体の環境マネジメントの今後のあり方について ● 東アジアにおける諸国民間の相互信頼関係の強化のための政策提言 ● 現代の大都市行政におけるコミュニティ支援政策の再検討	● 過疎地域の集落機能の維持向上策について ● 納税者による税の使途指定の考察 ● 政策の企画・実施・検証プロセスのガバナンス・システム ● 地域の手による新たな道路管理のあり方について	● 地方公共団体における地球温暖化対策の今後のあり方について ● 消費者・生活者の視点に立った安心・安全な取引・ものづくりに向けた施策について ● 地方自治体による国際交流事業の意義の再評価及びその強化策について一対中国事業を中心に、「パブリック・ディプロマシー」及び「自治体外交」の観点から「オール・ジャパン外交」の一環をなすものとして、また、自治体の振興にも重要な方途として ● 「東北型多文化共生社会」の現状と展望

1 公共政策ワークショップI

1年次に通年で履修する「公共政策ワークショップI」では、すでに協力関係を結んでいる中央省庁・地方自治体等の各種団体・組織(以下「プロジェクト機関」)が抱える政策課題について、実務家教員・研究者教員の指導の下、行政機関へのヒヤリング・現地調査、統計データの収集等を行いつつ、討論を繰り返して解決策を立案することが標準的な形態となります。

取り上げられるテーマは、その年によって異なりますが、内政、経済、国際、環境などの分野から、現実に政策課題となっているものが取り上げられます。

ここでは、6~8名程度の学生と実務家教員・研究者教員各1名のグループで運営されますが、各参加者が役割と責任を持ちチームとして行動していくことを通じて、政策の企画立案能力だけでなく、実社会でまさに必要とされる集団の中の一員として責任ある行動をとっていく能力を涵養することも目指しています。教員は適宜学生の自主的な活動を尊重し、学生が自分の力で問題に接近するように努めています。少人数だからこそ、学生の個性を把握しつつ、教員の指導と学生の自主作業とを結びつけることが可能なのです。

立案される政策案は、机上の空論にならないよう、グループ内の徹底した討論の中で多様な観点から検討されます。検討がなされた内容について、7月には、教員・学生全員が参加する中間報告会が行われます。中間報告会では、各ワークショップの学生たちが、これまでの検討によって明

らかになった問題点とこれを解決するための施策の基本的考え方などが報告され、それに対して厳しい質疑応答が行われることにより、最終報告に向けて考えを深めるきっかけを得ることが可能となります。

中間報告会の後も補足の調査や検討が行われ、完成した提案は、12月の最終報告会で報告されます。特に最終報告会では提案の内容だけでなく、説明及び質疑応答の的確さについても検討及び評価が行われます。これらを通じて、政策に関する文書の作成能力のみならず、質問能力・プレゼンテーション能力・答弁能力も涵養されていきます。

また、最終報告会の後、プロジェクト機関への報告も開催されます。



山形県鶴岡市でのヒヤリング

【現地調査の例 ①】
宮城県北部地震被災者へのアンケート

2003年7月に発生した宮城県北部地震によって住宅が全壊した被災者の住宅確保・再建状況について調査。

予備調査として、現地町役場と被災地を見学した後、宮城県、地元町の協力を得て無作為に抽出した280の対象世帯を訪問し、あらかじめ送付した調査票について、直接ヒヤリングを行った。

【現地調査の例 ②】
宮城県加美町へのヒヤリング

2007年7月から2008年1月にかけて、加美町関係者からのべ約200人にわたり直接ヒヤリングを行った。統計等の公開資料とこれらヒヤリングを基に、加美町の課題抽出、要因分析、対策立案を行い、2008年2月に加美町に対して政策提言を行った。この提言を受け、加美町は2008年4月に新たに政策推進室を設置し、提言の実現に向けて取り組んでいる。

ワークショップⅡ
最終報告会



2 公共政策ワークショップⅡ

2年次に通年で履修しなければならない「公共政策ワークショップⅡ」は、それぞれの学生が担当の実務家・教員・研究者と相談しながら独自の政策課題を選択するという形態で行われます。

政策課題は、学生各自が設定することになります。「公共政策ワークショップⅡ」で調査の基本的な技法を習得した学生は、担当の教員や他の学生と十分な議論を行いながら、中央省庁の本省庁や地方自治体、あるいは国際的な機関等に自ら足を運んで担当者と接触し、現場で自ら調査を行うことによって、調査技法および実社会での交渉技術の一層の向上に努めることになります。

● スケジュール例

前 期	● 指導教員、プロジェクト機関担当者からのレクチャー ● 文献講読による現状把握 ● 予備的な現地調査 ● 中間報告会へ向けた基本方針の作成
7 月	● 中間報告会
夏 ～ 秋	● 現地調査、関係者へのヒヤリング、アンケートの実施 ● 調査結果の分析
10～12月	● 政策目的・政策手段の再検討、政策案の実行可能性の検証と精緻化 ● さらなるデータ収集、ヒヤリング、比較事例の現地調査
12 月	● 学内での最終報告会
1～2 月	● 最終報告書の完成 ● プロジェクト機関への報告

上に努めることになります。

調査の結果は、逐次各グループ内で討論に付され、綿密に議論を重ねていくことによって、学生の相互啓発を促すとともに、その中でグループ活動としての要素が加味されることになります。

最終報告は、リサーチペーパーの形でとりまとめられ、担当教員等による書面及び口述の審査を経ることによって、政策立案・説明等の能力の一層の涵養を図ることとしています。特に優秀なペーパー作成者は、全教員・全学生の前でペーパーについて講演を行います。

VOICE 教員コラム



教授
稲葉 馨

公共政策大学院生の中には、「法律」に対して苦手意識を持っている方もいらっしゃると思います。しかし、公共政策は具体の法律や条例に体现されることが多く、その企画・立案に当たり、法的素養と基本的な法制度の理解が不可欠です。「法律に強い政策のプロ」を目指して、大いに研鑽を積まれるよう期待しています。

1952年静岡県生まれ。1975年に東北大学法学部卒業、同学部助手、熊本大学助教授、法政大学教授を経て、2000年4月より東北大学教授。2006年11月より2009年3月まで法学部専任教授。主著は、『行政組織の法理論』『行政法と市民』。



公共政策大学院 副院長・教授
苦瀬 雅仁

解決すべき社会問題が複雑化する今日、「真に解決すべき本質的問題が何か、その解決の鍵となる要素は何か」を正確に捉え、合理的で有効な対策を見出し、問題を解決していくことがますます重要になっています。それは実は難しいことですが、だからこそ今日それを可能とする高い実戦力を持った実務家が求められます。現実的かつ論理的な思考・議論を重ねる具体策を提言していくワークショップ等の本大学院の徹底した少人数教育を経てそうした力を持つ人材として飛躍してください。

早稲田大学大学院（法学修士）、ニューヨーク大学ワグナー公共政策大学院（Master of Science）。環境庁各局、外務省、UNDP、北九州市環境管理課長、環境事業団審議役、環境省総合環境政策局計画官、同企画官等を経て平成19年8月より現職。



准教授
飯島 淳子

国家・社会の「構造的変化」の只中にある今日、時に矛盾し衝突し合う理念・制度・実態を正視し、従来の学問上・実務上の蓄積をしかるべき限度において尊重しながら、緊張意識とバランス感覚を何とか失うことなく、理論的かつ実践的に試行錯誤すること。公共政策大学院での勉強は、不変的であり最先端でもある、このような困難な課題について、深く考えさせるものではないかと思っています。

東京大学法学部卒業、東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。2003年9月より現職。専攻は行政法。



准教授
戸澤 英典

2010年度は「東北型多文化共生社会」の現状と展望」をテーマとするWSを担当しています。

日本の他地域よりも速いスピードで少子高齢化による社会の変容を経験している東北地方において、外国人（外国出身）住民と共生する社会を如何に作り上げていくか——議論の確かな土台となるような調査・研究を進めています。

授業や公務員試験対策もこなしつつ、WSのグループ作業を通じて自らの能力やスキルを貪欲に高めていこうという学生の姿勢には、時に圧倒される思いすらします。フィジカルにも知的にもますますタフさが要求される次代の公共政策のプロフェッショナル養成のため、私自身にとっても学生との真剣勝負でタフな日々が続いています。

1966年岩手県生まれ。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。エッセン総合大学留学、欧州連合日本政府代表部専門調査員、大阪大学法学部講師・助教授を経て2005年4月より現職。専攻は国際関係論。

MESSAGE

[在学学生・卒業生の声]

1 東北大学公共政策大学院第7期生座談会

- ▶ 湯川 皆さんおはようございます。
▶ 一同 おはようございます。
▶ 湯川 本日の共同司会の湯川です。
▶ 安武 安武です。よろしくお願ひします。

志望動機

- ▶ 湯川 では安齋君から順に志望動機を。
▶ 安齋 一番魅力的だと思ったのはワークショップ(以下「WS」)です。それと自分は進路が決まっていなくて、この入試の面接で久武先生から「この大学は、まだ何をやりたいのかわからない人も勉強しているうちに見つけられるから、一緒に見つけていこう。」と言われたのに感動してここに決めました。卒業後の進路は今のところは国家一種の厚生労働省を考えています。
▶ 塩原 もともと大学院に行きたいという思いがあり、行政学を深めて勉強したかったというのと、もう一つ消極的な理由ですが、就職がうまくいかなかったということもあります。このパンフレットを見ている人でも実はそういう思いの人の中にはいると思うのですが…。それで、理論だけでなく実践を重視するこの大学院で自分の力をしっかり養おうと思い、浪人ではなく、敢えて自分を厳しい道に2年間置こうとここに進学しました。
▶ 松田 もともと大学院志望はありませんでしたが、国家一種が不合格だったので、留年するよりも自分を成長させるためには大学院かなと思いました。経済学部出身ですが、学部の卒業論文では、課題がわかった上で、それについてこういう方向に、というところまででした。この大学院のWSで、実際に市役所の方にも現状を伺って、具体的に実際のデータを使ってその課題の解決策の政策提案をする中で、細かいところまで詰めていくところも含めて、自分の足りない能力が磨けると思い、ここを志望しました。実際には課題すらわかっていなかったということにこの大学院に入って気づき、それもここに入って良かったと思う点ですが。
▶ 仲田 私は、昨年国家一種に合格し、官庁訪問をして結局内定が出なくて、それでもやはり国家一種を目指したいというときに、この公共政策大学院に在学していた知り合いに話を聞いて、国家一種を目指す人には、特に東北大学の公共政策大学院は向いていると知ったので、是非ここに来てみたいと思いました。
▶ 湯川 どういう点が国家一種を目指す人に向いていると思いますか？
▶ 仲田 教授の約半数が現役の霞が関からの実務家の先生なので、国家一種の官僚として働いた経験を直に聴ける環境にあるというのが、国家一種を目指す我々、そして志願者の皆さんにとって魅力的だと思います。
▶ 湯川 官庁訪問をする中で自分がだめだった点について感じたことと、大学院志望との結節点みたいなものはどんなことがありましたか？
▶ 仲田 去年の官庁訪問は自分の元気さだけで頑張ればいけるかもしれないという軽いノリで行ってしまいました。しかし、やはりそれだけでは足りず、理論や考え方、思考方法といったものが足りないと思いました。そういう面で、実務家の先生方が今まで実践されてきた思考方法などを教えていただいたり、盗みとったりできる環境にあるのが良いと思います。
▶ 平吹 もともと大学院に行きたいと思っていて、特に東北大学の公共政策大学院は自分の可能性を一番広げることができるとは思っていたし、進学を決めました。学部で学んだ社会学を活かすこともできますし、加えて政治学や法学も学べ、さらに、座学だけでなくWSを通じて協調性も含めて実践的な能力を身に付けられるのではないかと思います。
▶ 佐藤 私はここに来る前に英国に留学していましたが、その間に日本に恩返しをしたいと、そんな大きなことを考えまして、国家公務員を目指すなら公共政策大学院だろうと思いました。特に、WSで仲間たちと膝突き合わせて議論することで、論理的思考も身に付くだろうし、刺激し合ってみんなで勉強していける

かと思い、ここを第一志望で志願しました。

ワークショップについて

- ▶ 湯川 それではMECE(編注:重複なく漏れなく分類すること。大学院で学ぶ中でも出てくる言葉。)ではないですが、WSと他の授業、学習環境や施設について順次話を進めましょう。それを踏まえてどういう人が向いているかについては、志願者の関心事項だと思いますが、そのあとにM2の人を中心に聞くことにしましょう。では、現在のWSのテーマについて。
▶ 安齋 僕のWSBのテーマは「消費者・生活者の視点に立った安心・安全な取引・ものづくりに向けた施策について」というもので、消費者政策について研究しています。昨年、消費者庁が設立されましたが、消費生活センターへの苦情件数が減らないこと、地域によって消費者行政への格差があること、センター相談員さんへの待遇が悪いこと等様々な問題を抱えています。消費者行政はまだ発展途上の段階にあると言えるでしょう。WSBでは消費者が安心して商品を購入できるような世の中にするための法令・制度の改正を視野に入れた政策提言を目指しています。消費者政策は本やウェブサイトのさまざまな資料を調べてもわからないところがあり、やはり、現場の声というのが大事です。先日初めてヒアリングに行きましたが、WSで一つのテーマについて議論して煮詰めていく過程を経た上でヒアリングを行うと、勉強だけとは違って、実際に働いている人の問題に対する認識が違うことが良く分かり、大変参考になり、意味があると思いました。
▶ 湯川 WSの進め方はチームによって違うと思いますが、Bはどうですか？
▶ 安齋 Bはまず4、5月の段階では国会の議事録や消費者センターはどういうものかなどの資料を集め知識を蓄えます。6、7月はその知識をもとにヒアリングをしたり、知識の足りない部分を補充したりして実際に政策提言に向けて議論していくのかなと思います。
▶ 湯川 Bは公正取引委員会から来られている諏訪園先生が主担当だと思いますが、どうですか？
▶ 安齋 諏訪園先生は実際に法改正に携わっている先生ですので、法制度上の問題だけでなく、制度的に問題がなくとも他省庁からの反発があれば改正は難しいなどの、そういった相場観も含めて指導していただいています。こういう本を読んだだけじゃわからないことを学ぶことができるのがWSの魅力だと感じています。
▶ 湯川 こうしてはいいといった希望などはありますか？
▶ 安齋 WSでは先生があまり喋りすぎてもだめだし、学生だけだと物事についての知識もないので脱線して取り返しもつなないと思います。学生と先生の距離が大切になってくると思うのですが、先生から適切にアドバイスをいただいて方向修正などをしてもらって、逸れながらも何とか真直ぐ進んでいくという形が一番望ましいのかなと思います。そういう意味で諏訪園先生に適切に指導していただいていると思っています。
▶ 湯川 Aチームについて、テーマとどういう風に進めているかをまず。
▶ 仲田 私のWSAでは、「仙台市における地球温暖化対策について」というテーマでやっています。今年度で現在の市の地球温暖化対策推進計画が終了しますが、来年度からの新計画についての政策提言を目指しています。まだ始まったばかりですが、文献、ウェブサイト、ヒアリング等で問題状況についての情報を集めており、温室効果ガスの排出などの実態に関する科学的なデータに基づく現状と、施策面についての現状の二つの面から現状を把握し、その上で、何が現状における問題であるか、ということろを、チーム内で話し合い、検討しています。その上で調査を深めて、後期には政策提言への具体的な検討を行いたいと思っています。
▶ 湯川 Aは毎晩遅くまでやっているという印象がありますが、雰囲気とか議論の進め方はどうですか？
▶ 安齋 このチームと比べてここが負けているとか(笑)、

安齋 泰幸 (M1学生)

宮城県出身
法政大学法学部卒業

この大学院では学内外問わず沢山のひとと議論を交わし、様々な人の考えに触れ、自分の生き方を見つめ直すことができます。自分の将来像を描けない君、私たちと一緒に生き方を模索していきましょう。



佐藤 朋美 (M1学生)

東京都出身
津田塾大学文学部卒業

「どんなに高邁な識見も、それが現実と根をおろして実行されないのでは、一椀の汁にも劣る」とは、かの吉田松陰の言葉です。真に社会に通用する知識と人格をこの大学院で共に磨きましょう!



仲田 賢司 (M1学生)

大阪府出身
大阪市立大学法学部卒業

本大学院は、自分を磨くことができる場です。私たちに共に学び、成長し、夢の実現に向けて突き進みましょう。根性のある方を、お待ちしております。



平吹 夕衣 (M1学生)

宮城県出身
東北大学文学部卒業

ここは理論を学ぶだけではなく、現場に出て考えてみたい人に向いている大学院です。机上の空論に終わらない政策立案・政策提言能力と一緒に身につけていきましょう。



それぞれのチームに特色があると思うので。

- ▶ 仲田 先生の進め方に特色があると思うのですが、Aの苦瀬先生は、日本語を正しく使う方法にこだわっておられるのか、そこについてよく語られます。私たちは今まで一文字一文字について注意して来なかったのですが、そういうところをひとつひとつ丁寧にチェックしていただいて、その中で、どういうふうな文字や言葉を使えばいいか考えながら、喋ったり文字を打ったりするようになって、まず個人的にそういう日本語の使い方の面で少しは成長したかなと思っています。
▶ 松田 私もうAですが、文章の正確性などありますが、もともと他のWSと比べて特長と言える個人的な点として、データの見方が変わったことがあります。例えば「温室効果ガスの排出量で〇〇の分野の割合が大きいからそれが問題だ」と単純には言えない。割合が大きいからといってそれだけで問題が最大だと断定できず、削減の余地がどうかどうか背景を考えないといけない、といったことが分かるようになりました。これまで短絡的にいっていたのですが…。そういうことで問題分析がすごく難しくなってきました。他のWSに比べて相当長い時間を問題把握にかけていると思いますが、その点それは他のところに負けていないと自負しています。
▶ 湯川 議論の白熱の度合いはどうですか？
▶ 安齋 喧嘩にはなりませんがね。
▶ 仲田 喧嘩にはなりませんがね。
▶ 湯川 その辺はM2の塩原君と、安武君は？
▶ 安齋 ここにいる湯川君VS塩原君というのが何回もあったね。先生は西泉先生だったけど、ずっとここにいて座って途中で口出しせずに見守っておられましたね。
▶ 湯川 総務省から来られた地方自治をやってきた西泉先生

松田 昌幸 (M1学生)

東京都出身
慶應義塾大学経済学部卒業

周りの友人が社会人となり、厳しい環境で鍛えられている中で、大学院に進学することはそれ相応の覚悟が必要です！一緒に自身を磨き上げましょう！その環境は整っています！

塩原 康太 (M2学生)

富山県出身
新潟大学法学部卒業

素の“自分”の底力を鍛えたい方、働いているタメの人に負けない充実した日々を送りたい方、ぜひ一緒に学びましょう！視野の広さとタフさは、かなりアップするでしょう！

安武 弘太 (M2学生)

福岡県出身
学習院大学法学部卒業

修士一年ではクリティカルシンキングやグループワーク能力を徹底して鍛えます。貴方はone for all, all for one精神を実践できますか？

湯川 致光 (M2学生)

東京都出身
東京学芸大学教育学部卒業

座学だけではなく、人との学び合いをしていきたい人は向いていると思います。

のもとで、過疎対策、過疎地域の集落の活性化を1年間やってきたので。

▶**安武** とこもん学生の自主性を求められるチームだったので、逆に喧嘩するぐらい議論しないと物事が進まない。白熱しても絶対にあとをひかないということが条件だったけど。

▶**塩原** 湯川が「コンセンサスってなんだよ！」って出ていったことがあったんですけど(笑)、毎回のWSの議論で、どこまでコンセンサスが取れ、次にどこから議論すべきか、ということをはっきりさせるのは、結局最後まで難しかったですね。

▶**湯川** WSの良いところは1年間通じて同じメンバーと議論を積み重ねていくというところで、普通のゼミや授業内での議論と全然違うと思うんですよ。1年の間にはもちろん人間関係の問題も出てくるだろうし、ある種のOJTに近い部分があると思います。

▶**安武** 出身の学部も地方もばらばらなので、最初「共通言語」がなくて議論がかみ合わないのがとても苦労したよね。理系の人もいるから、それは一般的な言葉ではない、という言葉を用いたり、経済学系と法律系の人は特に意見が合わないことも多かったり、そういうのは苦労したよね。

▶**湯川** その言葉ってのかな、さっき仲田君が言ったように、日本語を相手にわかるように正しく伝える、つまり、それまで自分は言う側の立場だけで話をしていたというか、経済の話じゃないけど自分が何を言うかが重要と言うサプライサイドの発想だったのだけれど、WSをやって、どう言ったら相手が理解可能になるのかということをご意識するようになったね。そうしないと話が通じないので。

▶**安武** 社会に出たら全然違う人たちと議論して仕事していくわけだから、似た者同士で話せばかりでは通じないので。

▶**湯川** そういふ面では、間口が広くてさまざまな人が来るこの

大学院ではよりOJTに近いことができるんだと思います。

それではWSCは？

▶**佐藤** 「地方公共団体による国際交流事業の意義の再評価及びその強化策について」というテーマで、単に儀礼的に国際交流をやれば良いという意識が地方自治体に蔓延しているのではないかと問題意識から出発していて、どうすればもっと生産的な国際交流事業ができるのかということを議論しています。進め方は他と同じで、これまでは文献を読んでレジュメを切って発表するといった基礎的なインプット、そして議論。また、挨拶がてら基礎的なヒアリングを何件か、市役所や県庁に行ってきたということです。昨日あたりからやっと国際交流の定義などについて議論をはじめましたがまだふわふわしています。

▶**湯川** 先生は外務省の橋本先生で、ずっと海外におられたんですね。

▶**佐藤** アジア方面をいろいろ回られて大使をされていた方です。

▶**湯川** WSCは8人中4名女性ですが、議論の特色のようなものがありますか？

▶**佐藤** 皆がそれぞれいろいろな視点から物事を言えますが、誰かわーっと言っても必ずちょっと待てよという人がいて、ある程度の均衡がとれると思います。それぞれの役割分担と言うのがはっきりしてきて均衡のとれた議論ができてきているのかなと感じます。バランスのとれた良いメンバーだなと感じています。

▶**安武** 先生との距離感Cはどのよう？

▶**佐藤** メインは自分たちで問題を発見して議論するということ、それに先生が突っ込んでいて、ちょっと変な方向に行きそうになったら修正していただける。たまに逆になるんですけど(笑)。

▶**塩原** 一緒に食事に行ったりもするとか。

▶**佐藤** そうなんです、牛井行こうっておっしゃってくれて、この間も一緒にさせていただきました。飲み会だったり、誕生日会だったり、先生を交えてわいわいやったりしているので、フォーマルとインフォーマルの間が、他のチームと比べてもボーダレスかな。(笑)

▶**湯川** では最後にD。

▶**安武** これはまた特色あるからね。

▶**平吹** Dは東北型多文化共生の現状と展望についてです。東北型って何か、という問題もあるし、多文化共生社会ってそもそも何かという問題もあるので、今の段階だと4月5月の辺りでは東北の外国人登録者数とか就業者数とかのデータを集めてエクセルで加工し分析したり、論文など文献を読んでそれぞれ発表してまとめたということをやって、やっと最近定義づけに入ることになったりしています。

▶**湯川** 特色は？ここは負けないだろうなということとか。

▶**安武** 中間報告会に間に合うかどうか一番心配なのはDだからね。

▶**平吹** もちろんです。(笑)

▶**安武** 先生がすごく自由に生きている方ですね。

▶**湯川** どうですか、その先生との感じ、チームメンバー同士の感じは。

▶**平吹** 女子2人、あと残り5名男子で女子は少なめですが、議論では女子男子関係ない、さばさばした話し合いですね。先生は研究者の戸澤先生ですが、長くコメントを下さったりしないので、私たちの話し合いを聴いて先生が修正を図ってくれたりコメントを短く付け加えて下さったりというような形で、自分たちで結構議論を作っていくようなことをやっていますね。

▶**湯川** 議論では声が大きい人が主導権を握ってしまうということも起こりがちですが、女性から見えてどうですか？CとDは。

▶**佐藤** Cは半々だからということもあるかもしれませんが、あまり感じません。

▶**安武** Aは女性の方が強い？

▶**松田** 強いですね。陰のドンというかな。

▶**湯川** 僕たちも女子1人だったけど、どうだった？議論の上で男性、女性というのは。

▶**安武** 良くも悪くも女性扱いしていませんでしたね。

▶**湯川** それはそうだね。誰が言ったかじゃなくて、何を言っているかが重要だから。

▶**安武** ということとでどんだん女性来てください。待っています。イケメン多いですね。(笑)

WS以外の授業

▶**安武** WS以外にも魅力的な授業があると思いますが、それについてもHPで見られるシラバスだけでは分からない生の声を。

▶**松田** 私は経済学部出身なのですが、全体的に法学系、政治学系の授業が多く、今までにない思考、フレームワークを感じる意味ではすごく良かったのですが、いきなり修士レベルということで大変という思いはあります。そういう意味では個人的には経済学の授業がもう少しあると良かったなという思いはありますけど。

▶**仲田** 授業はやはり法学部出身者には有利かとは思いますが。ただ特に詳しくすぎる内容でもない、他学部の方でもわからないということは全くないと思います。私は法学部でしたが、公務員試験(法律職)の勉強をしていたおかげで授業自体わかるという面が多かったですね。先生の話し方が良いからですが、政治学や行政学でも公務員試験で出てくる程度でわかる授業をして下さいます。色々なバックグラウンドを持った人が来て話し合うと面白い体験ができるので、法学部以外の方でも、授業に関しては恐れず、来ていただきたいと思います。

▶**湯川** 授業のやり方の部分での特色については？

▶**塩原** 少人数で実務家の先生と議論しながら作っていく授業も多くて、体験を踏まえて話をしてくれます。本当に教科書だけでは分からない実際の政策の現場でこうやっている、ということも学びながら議論する授業が多いのは特色だと思います。

▶**安齋** 人数が少なく、授業中に結構構って来て先生との会話が授業が進むので頭にすく入りやすい印象です。眠れません。(笑) 本当に参加型だと思います。

▶**平吹** 県議や市議、マスコ関係の方など外部の先生のお話を聞いてレポートにまとめたり話しあうといった授業が面白いんです。

▶**安武** 勘違いされやすいけど、良い公務員になるのには役立つけれど、公務員試験に直接役立つ訳ではないという授業がいくつかあります。試験だけなら予備校の方が良いかもしれませんが、そういう大学院じゃないですから勘違いしないでくださいな。

▶**湯川** 確かに授業のプレッシャーがすごいですね。経産省の久武先生ですけれど「君どう思う？」というのがとても多くて、予習をすごくしていないといけない。ある種良い強制力が働いて授業で力が磨かれる、姿勢が変わる、というのが授業の良いところかなと思う。

施設について

▶**松田** 自習室とWS室が24時間開いていて使えるのが、すごくよかった。7月から新しい建物でよりきれいになって、施設環境は最高だと思う。ただ、一つだけ、本館など他の図書館から簡単に希望図書を送ってくれて借りられるとはいえ、片平キャンパスの法科と共用の実務法政図書室の本の貸し出しはちょっと制約が厳しいかなと思う。

▶**安齋** 一番良かったのはWS室がずっと開放されているということ、そこにいくと何人かいて、論理的な議論がいつでも自由にできる場になっているのが大きいと思う。

▶**湯川** 僕の場合、ふと思いついたときにすぐ安武と議論できる、という環境があることが自分の考えを壊して構築しなおす作業をする上でとても役に立ちました。成長のスピードを、環境面から後押してもらったと思います。

この大学院はどういう人に向いているのか

▶**湯川** 大学院はだいたいこんな感じということかと思いますが、それでは、何を学びたい、どういう能力を身に付けたい、どうなりたい人のために、この大学院がその手段として有用だと思うのかについてM2の人からお願いします。塩原君。

▶**塩原** 自分の視点を持ちたい人、自分はこう思う、こうした方がよいという力を付けた人。

▶**安武** 向いている人は本気になる人。小出ししたり逃げたりする人は成長できない。自立しているながらも柔軟性を持っている人。

▶**湯川** どういう自分になりたいのか考えながら自分を作っていく人には、ある種の強制力がありつつ、バックアップする環境があると思いますな。

▶**佐藤** 皆さんに同感ですが、私はWSの議論に貢献するためにも一人で勉強する時間もすごく大切で、一人でいることが苦じゃない人も向いていると思う。ある程度自分の意見を確立させることが重要。

▶**安武** 公務員志望者に限られているわけではない。

▶**湯川** 自分の考えを持つことはどこに行っても重要。汎用性があると思う。

▶**安武** 公共性とは何か、といった根本的なことから考えていく人、いきいたい人には向いていると思う。そしてそれだけでなく、そこから現実まで引っ張っていくのがこの役割だと思う。

大学院生活全体について

▶**湯川** どんな生活を送っているか。生活の全体の中での時間配分などを。

▶**安齋** WSが火曜日のほかに金曜日にもサブゼミがあって、

それぞれに数時間を準備にも使います。僕の場合は他の授業は3つだけで、あまり重荷でなく、自分の自由な日が週3日ぐらいあって公務員試験とも十分両立できると思います。時間の管理次第ですね。息抜きでたまに火曜のWSのあとに食事や飲みに行くこともあります。WS授業・私生活は5:1.4って感じですね。

▶**松田** WSの比重がとて大きくて、普通の授業と8:2ぐらいの割合です。趣味の時間は少ないです。工夫次第ではあるけれど、結構ストイックにならないと公務員試験の勉強時間を確保するのは個人的には難しいかなと思う。大学院では大学院に打ち込むぞ、という感じで公務員試験の勉強は学部時代に終わらせての方が良いかもしれませんね。(笑)

▶**仲田** 自習を私生活に入れてWSと私生活がぐちゃぐちゃな7:3ぐらいかなと思います。WS以外の授業は予習復習の必要が少ない授業を少ししか取っておらずあまり負担になっていないです。WSにかなり時間を使っています。4月の最初の2-3週間は「公共政策の展望と方法論」の授業もあってかなり忙しいです。学部4回生の最後にしっかり勉強してM1の時点で国家一種に最終合格を目指す方が多いと思います。6月の初めになると勉強しようと思えば勉強は確保できると思います。趣味までの時間はそれほどないと思います。自分を磨くところなので休憩をしている暇はないと思いますので。

▶**平吹** 私は公務員試験や資格試験の勉強と私生活的な遊びなどと合わせて、WS授業・私生活が6:2.2ぐらいですね。私は授業も公務員試験やTOEICなどの勉強も時間を取りたいです。私は街を一人歩きののが好きなのですが、片平はカフェなども多く立地が良いです。旅行にはこの前も行きました。ヒアリングが好きなので出張にも行くと思っています。

▶**塩原** 去年WSで関心を持った上勝町にワーキングホリデーで行って来たんですが、自分で時間を作っているのはやはり学生ならではだと思います。

▶**安武** 時間が取れるのは長期休暇のときぐらいだね。

▶**佐藤** WS授業・それ以外、として、5:1.4ぐらいかな。授業の分からないところはその時間内に何とか潰すようにして、今年から始めた公務員試験勉強になるべく時間を取るようになっていきます。心が折れないように、でも時間を無駄にしないように、リフレッシュのために朝の準備をしながら、音楽を聴くとか、寮で他の学生と英語や日本語で話すとか、お手洗いで本を読むとか……。本当は趣味は楽器演奏ですけど、この2年は修行と思って俗世の物は実家に置いてきました。

▶**安武** WSとそれ以外を6:4の割合と目指していたけど、グループ内での責任ということもあり、実際にはWSが重くなって、自分の勉強時間があまり取れなかったところがある。成長はそれでできたので後悔はしていないけど、チームで協力しないとタイムマネジメントはできないですね。

▶**塩原** 実践することを二年間頑張ろうと思っていたので、現場に出るということでWSの関係で過疎地域のお祭りに行ったり、上勝町に行ったり、仙台市で公募した研究員の活動をして市長に提言することもできたので良かった。その一方で専門性を高めたり関心分野の勉強とか公務員試験勉強をしたりが予定通りにできなかったという反省がありますね。

▶**湯川** 僕自身、最初は時間の配分かなと思っていたんですけど、やっていくとWSは集団作業の中での責任もあって難しい部分もあったんだけど、気付いたら、配分の問題というよりも自分のキャパシティが増えていく。やらなきゃいけないこといくつもがある中で、成長して、キャパがどんどん増えていって、その中でまだ配分ができていくというようなことが自分の中であつたと思う。確実に1年間でキャパは増えているし、無理だと思ったこともできているのかなあと思いましたね。

▶**安武** ちなみに2年生になるとWSⅡはリサーチペーパーということで個人作業になるので自分でマネジメントしやすくなるし、公務員試験勉強は1年生の時からやりたいけどほかのことは2年になってからできると思いますね。

▶**塩原** 仙台市は規模の大きい都市なので、趣味を生かす場が多く、自分は社会人サッカーをやっているんですが、仙台市長は学生の地域参画を進める方針だし、そういうチャンスがあるというのは仙台市にあるこの大学院のメリットの一つだと思えますね。

▶**安武** 仙台市は適度に東京にも近いし、地方に身を置き地域が見られるメリットもありますね。

志望者へのメッセージ

▶**湯川・安武** 最後に志望者へのメッセージを。

▶**仲田** 気合いのある人に入ってきてもらいたいと思います。私は大阪出身ですが、離れた地方の人でも受け入れてくれるのは是非来てください。

▶**松田** 確実に、今までの人生の中でトップクラスに忙しい時間が送れるんじゃないかなと思いますので、そんな日々を期待と希望を持って、自分を磨くという思いを持ってぜひ来てほしいと思います。

▶**安齋** 梓の中で決められたことをやりたくない人に来てほしいです。自分の意思ですべて考えていけるようなところなので。

▶**塩原** 公共とは何かというテーマを学ぶ2年間はかけがえのない期間になると思います。ワンランク上の人間になりたい人を待っています。

▶**平吹** 自分が「なぜ?」って疑問に思ったことを突き詰めて考えていける人に、是非来てほしいと思います。一緒に徹夜しながら考えていきましょう。

▶**佐藤** 2年間で修行と捉えて、その修業に生き抜く覚悟のある人。仙台という場所柄もあって自分の間口がすぐ拡がると思うので、自分のキャパシティをもっと大きく広げたい人、ぜひ来てください。



エクステンション 教育研究棟



東北大学公共政策大学院の施設が一新されます。

平成22年7月27日、片平キャンパスの本部棟北(旧本部棟跡地)に、地上6階建て、延べ床面積約6,850m²のエクステンション教育研究棟が完成いたします。

現在、公共政策大学院の講義室、演習室、自習室、パソコン室および法政実務図書室は、片平キャンパス内の複数の建物に分散して配置されています。一部は老朽化した建物もありましたが、エクステンション教育研究棟竣工後は、公共政策大学院のすべての設備を一箇所に集約・一新することで、より充実した学びの環境が実現されます。

また、この新棟には、法科大学院、法政実務教育研究センター、ジェンダー平等と多文化共生研究センターのほか、会計大学院や全学の大会議室や広報ギャラリー等が入る予定です。

中でも、法政実務図書室は、書架スペースを拡大するとともに、閲覧机や自習用の個人キャレを設置して、在学生の学習環境の支援を行う予定です。大講義室や3つの小講義室は、大型のスクリーンや最新の視聴覚機器および情報通信設備を備え、講義や演習のほか、国際会議などにも対応できる施設となります。自習室は、24時間利用できます。また、全館の主要箇所に無線LANアクセスポイントを設置し、講義室や自習室のほか、COMMONルームやリフレッシュコーナーなどからもネットワークに接続することが可能です。

エクステンション教育研究棟は、平成22年7月末に供用を開始いたします。

2 卒業生からのメッセージ

学び、実践することは楽しい

細貝 拓也

茨城県出身、東北大学法学部卒。平成21年度、環境省入省。
現在、環境省大臣官房総務課。



卒業から約一年が経ちました。当時は、人生で一番忙しいと感じていましたが、今の職場では、そんな自己記録を軽く飛び越えた毎日を送っています。そうした日々の中で、以前と変わらず感じるの、学び、実践することの楽しさです。

本大学院では、今まさに起こっている問題を扱い、文献調査やフィールドワークを重ね、現実はどう落とし込むかに頭をひねります。悩み、苦しむことも多いですが、その過程は純粋に楽しいものでした。今の仕事においても、その思いは常を感じています。

本大学院で得られる実利的なメリットはたくさんありますが、それと同等に、「理論と実践」の場に身を置く楽しさが、ここにはあると思います。現実の問題にぶつかってみたい方は、ぜひ本大学院の門をくぐられることをおすすめします。

公共政策大学院で学んだこと

竹岡 洋

千葉県出身、大阪大学人間科学部卒。平成22年度、東京都庁入庁。
現在、東京都総務局人材育成センター勤務。



本大学院で学んだことは、現実には起きている事象をどのように「問題」として捉え、その問題の原因は何であるかを分析し、その原因に対応した現実的かつ効果的な解決策を考える、といった政策立案の基本でした。と同時に、この政策立案の過程には、論理的思考能力や文書作成能力、調整能力など様々な能力が必要とされることを学びました。

これらのことは、簡単には身につけません。ただ、自ら「出る杭」になれば、愛を持ってその杭を打ってくれる（鍛えてくれる）環境が本大学院にはあります。成長を実感できる2年間を過ごしたい方、お勧めします。

理論と現実

菅野 玄德

福島県出身、東北大学法学部卒。
平成19年度、国土交通省入省。平成22年度より福島市役所勤務。



「先生、僕、河川行政について論文を書いてみたいんです。」「君ごときに河川は扱いきれませんよ、ほおほほ。」と担当教官に一蹴されたのは、約3年半前。それから1年半後、国土交通省に入省し、何の因果か最初に配属されたのは河川局水政課。

大学院等で学んだ理論と、実際の現実との齟齬。地方分権改革は一体どうして必要で、誰の利益になるのか、誰が不利益を被るのか。常々そんなことを感じながら、河川行政の最前線に立ってきました。

今後、様々な意味でシュリンクしていく日本において、如何に公共サービスの質・量との低下を防ぐか。官から民へ、などという難な議論ではなく、今まで「公」が抱え込んできた所行を、ひとつひとつ丁寧に住民たちの手に戻していくことに、そのポイントがあるのだらうと思います。じゃあ、現場ではどうなんだ？ 実際に動ける人間はいるのか？ よし、オレが起爆剤になってやろう！

というわけで、現在は地元・福島市役所で働いています。

「千本ノック」を浴びて

大泉 玄之助

宮城県出身、東北大学法学部卒。平成18年度、公正取引委員会事務総局入局。現在、経済取引局企業結合課勤務。



本大学院で得たものは、「打たれ強さ」と「疑う姿勢」であったと思います。教員から浴びせられる問題提起は、千本ノックのようでしたし、友人との討論は、ノーガード戦でした。大学院での2年間は、ひたすら自分を苛め抜く日々でした。この中で培った2つのことは、「考え抜く姿勢」へと変化して、現在、仕事の中で役立っていると思っています。皆さんも、未来への投資の一環として、本大学院の扉を叩いてみては如何でしょうか？

VOICE

教員コラム



准教授

西泉 彰雄

「課題は現場にある」。これは私も実務経験を通じて痛感していることですが、一方、現場主義を実践することは「言うは易く行うは難し」です。「公共政策ワークショップ」では、この現場主義を実践するべく様々な現場に飛び込むことになり、容易には真の課題に迫り着けず、戸惑いと試行錯誤の連続になるでしょう。しかし、その経験は得難い財産になるとともに、その過程で多くのことを学び、「現場の分かる」政策プロフェッショナルへと成長していく重要なワンステップとなることを確信しています。

1993年慶應義塾大学法学部卒業後、旧自治省（現総務省）に入省。長野県観光課長、市町村課長、総務省地域情報政策室課長補佐、さいたま市政策局総合政策監・情報統括監、自治大学校教授などを経て2008年8月から現職。



教授

坪野 吉孝

本大学院に来られたら、今日の社会の具体的な問題に向き合い、その解決のための試行錯誤に取り組んでみてください。学問は縦割りですが、問題は縦割りでは解決できません。新しい知識やスキルを身に付け、仲間や教員と議論し、現場に足を運んでください。その成果を「ささやかな貢献」として形にすることが、かけがえのない経験になるでしょう。

1989年東北大学医学部卒、1993年同大学院修了。国立がんセンター研究所、ハーバード大学公衆衛生大学院、東北大学医学部助教を経て、2004年4月より現職。



准教授

金 淑賢（キム・スキョン）

東アジア政治外交論を担当し、「理論」と「実務」のバランスの取れた研究を目指しています。公共政策大学院では、日韓中を含む東アジアの専門家と世界のグローバル化に対応できる人材を育成したいと考えています。世界で活躍できる人になりませんか。

1995年韓国外国語大学卒業。韓国外交通商部外交安保研究院研究員を経て東京大学に留学。2007年同大学にて博士号取得。衆議院議員小沢一郎の秘書を経て、2008年5月より現職。専攻は東アジア政治外交論。



准教授

金谷 吉成

昨今の情報通信技術のめざましい発展は、私たちの社会や生活に大きな変革をもたらしています。複雑化した社会問題と向き合う場合、法学や政治学などの伝統的な社会科学からのアプローチだけでは必ずしも十分とは言えません。すなわち、人文科学、自然科学を含めた多方面からの分析と評価が必要不可欠です。本大学院には、それを可能にする教授陣やさまざまな学問分野からの学生が集っています。このような環境の下で、ぜひ学際的な知識・考え方を身に付けてもらいたいと思います。

1970年岩手県生まれ。1994年東北大学法学部卒業。（財）仙台応用情報学振興財団研究員、東北大学法学部助手、同法学研究科講師を経て、2008年4月より現職。専攻は法情報学。

ENTRANCE EXAMINATION

[2011 年 4 月入学用の入試関係情報]

1 アドミッション・ポリシー

東北大学公共政策大学院が受け入れる学生像とは、そのカリキュラムによって自己の能力を一層涵養することのできる人物であり、具体的には以下の資質を持つ人物です。

公務及び公共政策の立案・制度設計に
不可欠の法学・政治学への理解を、
基礎レベルで有すること。

討論・交渉・文章作成など
コミュニケーション能力を豊かに持ち、
集団作業への適性を有すること。

公共性への情熱を持ち、
公務に対し献身的な資質を
有すること。

したがって入学試験では、入学後科目履修に必要な法学・政治学への基礎的な理解を有していることを考査するとともに、「公共政策ワークショップ」において集団作業に積極的に参加する人物であることを面接で審査します。これによって、法学部卒業生のみならず、社会人・他学部学生が受験しやすいように配慮します。

2 概 要

入学試験は9月の土曜日および日曜日に行われます。また、合格発表は、入学試験の1～2週間後に行います。
入試会場は、東北大学片平キャンパス（仙台市青葉区片平）となります。入学試験は、提出書類、小論文および口述試験の総合判定により行います。小論文は土曜日の9時～10時30分に行い、口述試験は土曜日または日曜日に行います。

3 小論文

小論文は、土曜日9時～10時30分に行います。

小論文の問題は、内政関係の政策課題、経済に関連する政策課題、および国際関係の政策課題の3分野から出題します。受験者は、その中から一つを受験時に選択して、小論文を作成します。ここでは、受験者の具体的な政策課題への対処法として作成された文章から、受験者の法学・政治学についての基礎的な理解を考査し、かつ現代社会が抱える政策課題についての基礎的な知見を審査することが目的となっています。小論文では、例えば次のような問題が出題されます。

内政関係の政策課題

先の衆議院議員選挙においても地方分権改革は大きな争点となった。我が国の地方自治の現状及び課題について思うところを述べた上で、地方分権改革の目指すべき方向性及びその進め方についてあなたの考えを論じなさい。

経済に関連する政策課題

昨年9月のいわゆるリーマンショック以来の金融危機については、「百年に一度の金融危機」とも言われており、世界的な金融危機の波及について様々な構造的要因も指摘されている。この危機に際して各国当局・国際機関が講じた対応策について、危機の原因などにも触れつつ、あなたの考えるところを述べなさい。

国際関係の政策課題

中国の急速な発展とアジア・世界におけるプレゼンスの増大が指摘されている。日本は中国との間では、1972年の国交正常化以来、友好関係を第一義としてきたが、こうした状況を前にして、日本はいかなる対応をすべきだと考えるか。あなたの考えを述べなさい。

4 口述試験

口述試験は、土曜日または日曜日に行います。日時は後日受験者に通知します。受験者が多数となった場合、一部受験者については、その了解を得た上で、上記の試験日に加えて、これと近接した日程で試験を実施することがあります。口述試験は、複数の面接実施委員により、受験者1人ずつ、60分程度で実施します。

口述試験は、受験者の法学・政治学の専門知識を問うものではなく、コミュニケーション能力や集団作業能力等を総合的に判定するために行われます。

5 本年度の入試日程 場所 出願方法について

東北大学公共政策大学院ホームページに掲載されております。

<http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>

出願受付

2010年
8月30日(月) → 9月3日(金)

東北大学大学院法学研究科専門職大学院係にて郵送により受付。
9月3日消印有効。

入学試験

2010年
9月25日(土) → 9月26日(日)

仙台(東北大学公共政策大学院)で実施。

合格者発表

2010年
10月1日(金)

東北大学公共政策大学院ホームページ上に掲示。

(<http://www.publicpolicy.law.tohoku.ac.jp/>) 受験者には別途通知



入学オリエンテーション

募集要項及び出願書類の用紙は、7月中旬以降に法学研究科の窓口で配布します。また、郵便で取り寄せることもできます。郵便での募集要項及び出願書類の取り寄せ申し込みについては、2010年7月12日以降以下の方法にて受け付けます。

1) 申し込み方法… 返送先の住所・郵便番号、氏名を記入し240円分の切手を貼った角型2号の返信封筒を同封し、表書きに「公共政策大学院募集要項請求」(朱書き)と明記して、右記宛郵送してください。

2) 申し込み先…… 〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学公共政策大学院専門職大学院係

VOICE

教員コラム



教授
久武 昌人

自由な発想

私の研究室の窓からは、植物園とそれに連なる山々の緑が鮮やかに見えています。「杜の都」を実感するときですが、その向こうにはとてもモダンなテレビ塔があり、シュールな風景でもあります。ふと、これをモチーフにどんな絵を描くことが出来るのだろうか、と考えてしまいます。マグリットなら? ダリなら? あるいは、風景画はほとんどないようですがフェルメールなら?

今、なぜ他の画家の名前が出てこなかったのでしょうか。それは私自身の持つ一種のバイアスによるのかもしれませんが、ここ仙台での私の「モチーフ」、それは、「公共政策大学院は広義の政策形成過程の一構成要素であり、その態様は、国会、行政、シンクタンク等のそれと共に、一種のナッシュ均衡をなしていると考えられるのではないか、そうであるとして、自分が関与できるこの空間で何をなすべきかを考えること。」だと言って良いと思います。

判断を持って見ず、深く考える。容易なことではありません。どうすればよいのでしょうか。学生のみならず共に良く考えて行きたいと思っています。

1982年東京大学卒。同年、通商産業省入省。知的財産権立法、通商摩擦、産業人材育成、国際金融問題、国際資源外交等に携わる。この十年では、京都大学経済研究所助教授、通商政策局情報調査課長、経済産業研究所上席研究員(兼)東京大学公共政策大学院非常勤講師、産業政策局経済解析室長等を務める。2008年夏から現職。



教授
橋本 逸男

公共マインドある
外交を求めて

公共政策大学院は、公共マインドのある為の学生、研究職教員と実務出身教員の協力による(夫々の特長を活かした)指導、世間のそれに寄せる高い期待・評価、の三つの存在が相俟つと、理想的に機能し、大きな成果を挙げ得ると思います。実際の希望進路が何であれ、「公共」的な志操を持つ、「志の高い」諸君よ来れ。諸君は、この緑豊かな東北の雄都仙台の当大学院での研鑽を経て、選択する職種の如何を問わず、必ずや社会に尊い貢献を為し得るに至ると信じます。私は、と云えば、「公共」(政策)の最たる外交、この、国家の存立・興亡に関わる分野を、「外交」に準ずる対外交渉全般、様々な「(外交)主体」(地方自治体はその重要なものです)による様々な対外努力を含めて広義にとらえ、我が国の対外関係、外交力を強化する方途を追い求めています。

1948年福島県生まれ。安積高校から東京大学(中退)、外務省へ。ハーバード大学で修士(地域研究・中国)。中国担当が長く(公使、上海総領事を経験)、ASEAN(二か国で大使)、米国、南アジアでも勤務。国内は、外務本省(アジア、経済協力、文化広報、情報、危機管理、領事等)の他、内閣官房(二度)、(財)自治体国際化協会でも勤務。



准教授
桑村 裕美子

柔軟な思考力を

私の専攻は労働法ですが、労働は私たちにとって身近な世界ですから、皆さんの関心も高いと思います。現実社会で起こっている諸問題を解決するには、現行法制度の基礎知識を身につけることはもちろんのこと、自らの目指す方向性を明らかにし、それを実現するためにいかなる手段・制度を選択することが望ましいかを、幅広い視野にたつて考察することが求められます。そこでは特に、多様な利害を踏まえた柔軟な思考力が不可欠となるでしょう。本公共政策大学院では、問題解決のアプローチを主体的に学ぶための様々な授業が用意されていますから、卒業の頃までには自然とそうした力が身につくようになっていきます。

鳥取県生まれ。2004年東京大学法学部卒、同助手。2007年4月より現職。専攻は労働法。



東北大学理事・教授
植木 俊哉

充実した教育
内容の大学院

東北大学の公共政策大学院は、2004年に国立の公共政策大学院として最も早く開設され、少人数の学生に対する密度の濃い充実した教育内容をその特長としています。とりわけ、行政の中核での豊富な実務経験を有する優れた実務家教員と最先端の研究に従事している研究者教員とがベアを組み、少人数の学生グループによる特定の行政テーマに関する自主的な調査研究と政策立案を指導する「公共政策ワークショップ」は、本学の公共政策大学院の大変優れた特色ある教育システムを構成しています。この「公共政策ワークショップ」を通じて、皆さんは、単なる知識や技術にとどまらない政策立案過程でのさまざまな課題に自ら挑戦し、問題の解決に向けて取り組む専門的能力を身につけていくことができます。「公」の課題に挑戦する意欲に富んだ皆さんの入学を心からお待ちしております。

1983年東京大学法学部卒業。東北大学法学部助教授を経て、1999年より東北大学法学部教授。2004年から2006年まで東北大学大学院法学研究科長・法学部長、2006年から現職。専門分野は、国際法・国際組織法。

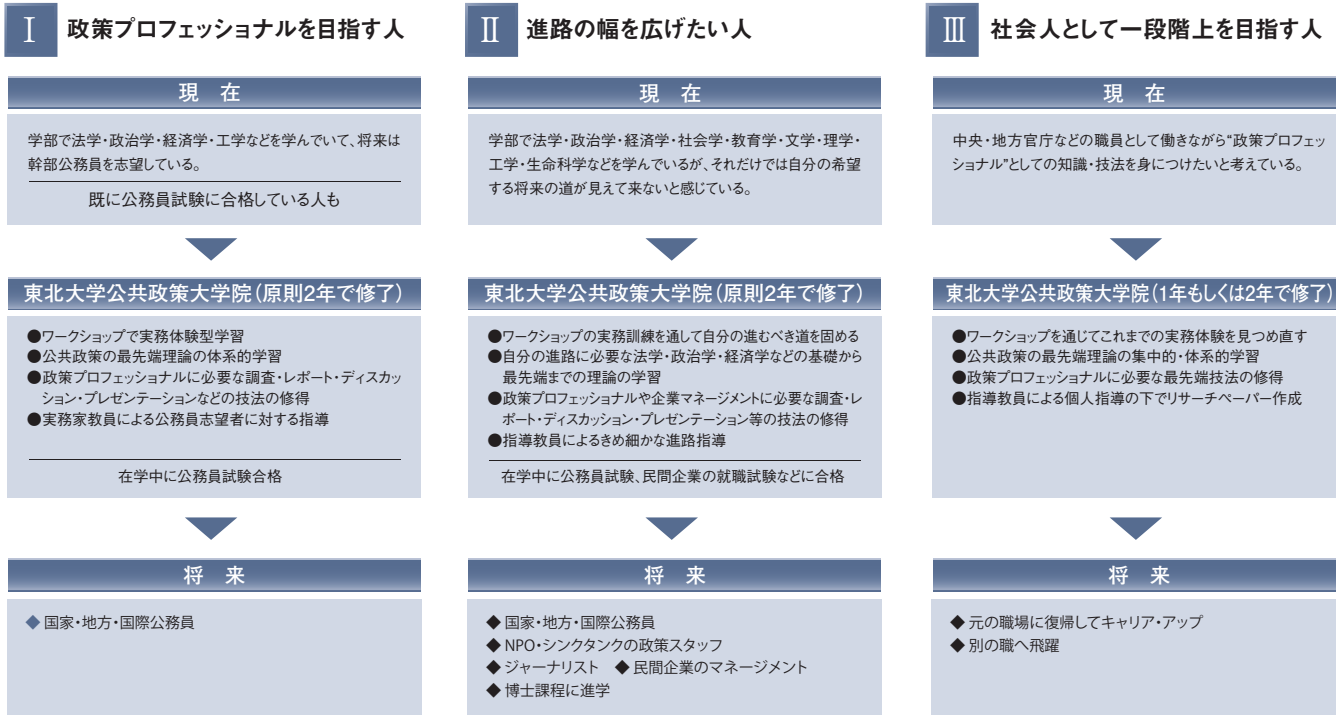
AFTER GRADUATION

[就職・進路関係]

東北大学公共政策大学院はどんな人たちが学ぶのにふさわしいところなのでしょうか。

また、そのような人たちが東北大学公共政策大学院に学ぶことによって、

どのような将来の道が拓かれるのでしょうか。



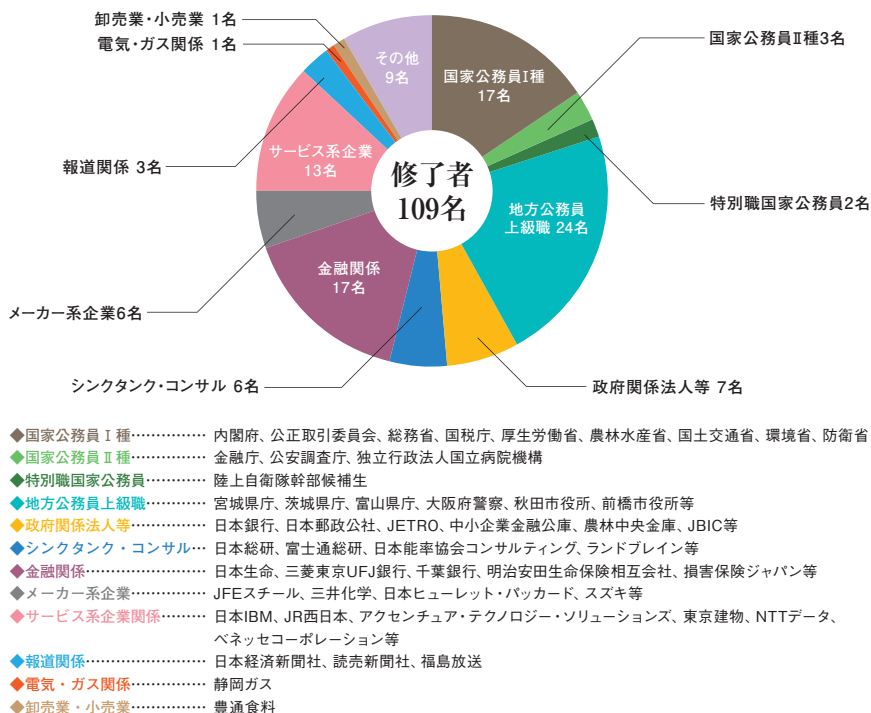
卒業生の就職先・進路としては、中央省庁・地方自治体等の幹部候補生、国際公務員のほか、ジャーナリストやシンクタンクのスタッフ等を念頭に置いています。

大学の医学部や法科大学院と違い、修了証書と資格試験の受験要件がリンクした大学院ではありません。しかし、国家公務員試験の制度改革においては、単なる知識にとどまらず応用能力を重視する方向性が強められており、本学のカリキュラムはそれを先取りしたものと自負しています。

また、ワークショップ等を通じて獲得されるであろう、課題発見に始まり情報収集、解決策の作成検討に至る政策の企画立案に関する様々な能力は、社会人として実務に携わっていく上でまさに有用なものであり、およその官公庁・企業等において高く評価されるものと考えています。

なお、国家公務員・地方公務員になる場合、各種の公務員試験に合格する必要があります。これらの試験への対策については、個々人の学習によるところですが、公共政策大学院としても、数度にわたる個別相談や環境整備等を通じて支援しています。

修了生(第1期～第5期生)109名の進路



GREETING

[ごあいさつ]



東北大学大学院公共政策大学院長 教授

牧原 出

1967年愛知県生まれ。東京大学法学部助手、東北大学助教授を経て、2006年4月より東北大学教授、2009年4月より公共政策大学院長。専攻は行政学。主著は『内閣政治と「大蔵省支配」』（サントリー学芸賞）。



東北大学正門

公共政策大学院へようこそ

2004年に東北大学公共政策大学院が発足して6年が経ちました。毎年多くの学生が、面接試験で複数の試験委員から矢継ぎ早に繰り出される質問に60分間食らいつき、公共政策ワークショップI・IIで徹底的に政策的思考をたたきこまれ、卒業後は国家公務員、地方公務員をはじめ、金融、情報通信、シンクタンク、マスコミと多くの分野へ巣立っています。最近では、留学のために推薦状を依頼されたり、はたまた留学先で就職し現地の人と結婚したという便りをいただくこともあります。

この6年間は、教員にとっては、日本では初めての試みであった政策の調査・提言を集団作業で行う「公共政策ワークショップ」をどうやって成功させるか、試行錯誤の連続でした。宮城県・仙台市を主たるフィールドとした内政・経済面でのワークショップや、ニューヨーク、ソウル、北京へと調査に学生が出かけた国際ワークショップなど、毎年教員は知恵を絞ってテーマを設定しています。学生たちもこれに応え、グループによっては総計50以上のインタビューをこなし、アンケート調査を行い、その結果について徹底的に討論し、報告会前は深夜までワーク

ショップ室で作業を続け、報告会では厳しい批判に耐え、ときに堂々と、ときに批判に負けそうになりつつも気を取り直して反論に努めています。春の花見、秋の芋煮会、女子学生の会など、年次を超えた学生主体のイベントもいろいろ企画されているようです。少人数の大学院ならではのスクールカラーが出てきました。

ここまで手作りで大学院の基礎が固められてきました。このプロセスに参加した学生たちは、大学院の中で大きく飛躍して、社会の第一線で日々活躍しています。大学院もまた、これまでの経験をもとに、今後一層さらに多方向へと発展していきます。外部講師を招いたホット・イシューについての講演会の開催や、国際系の授業の充実、政策研究方法論の講義など、すでにいろいろな試みが行われています。リーマン・ショック以後の金融危機と経済危機、戦後政治の行き詰まりと統治機構改革の進行という国内外の転換期に立つ今、私たちと一緒に、この新しい大学院で自分を大きく成長させてみませんか。そんな意欲のある皆さんと4月に片平キャンパスでお会いする日を楽しみにしています。

未来の政策のプロを目指して

東北大学公共政策大学院は、仙台市の中心部に位置する東北大学発祥の地、片平キャンパスにあります。東北大学は日本で3番目に設立された国立大学であり、2007年に創立100周年を迎えました。片平キャンパスはその伝統を今に伝える落ち着いた雰囲気があります。本大学院は、我が国初の本格的な公共政策大学院の一つとして2004年に設立されました。教員スタッフは、中央省庁から派遣された高い専門性と教育の熱意を持つ行政実務家と、最先端の政策科学を探究しその成果を教育に活かす研究者から構成されていて、非常に充実しています。「公共政策の展望と方法論」と「公共政策ワークショップI・II」を中核とす

る懇切丁寧な学生指導により、「政策のプロ（エキスパート）」として、実務と理論の両方に秀でた修了生を、中央省庁を始めとする「政策の現場」に毎年送り出してきました。

現在、経済社会の複雑化とグローバル化の一層の進展により、政策科学の分野では、従来型のハードな規制からガイドラインを典型とするソフトな誘導型の手法への転換が模索されています。本大学院において、未来の政策のプロを目指す意欲のある人が、新しい政策分野に挑戦しながら、目標の実現に向かって前進していかれることを願っています。



東北大学大学院法学研究科長 教授

芹澤 英明

1959年神奈川県生まれ。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学、エセックス大学法学部大学院修了。東北大学法学部助教授・教授を経て2009年4月より現職。専攻は英米法、トランスナショナル情報法。